



心理科学部 教授
高橋 憲男

1994年4月、立ち上げて間もない看護福祉学部の臨床心理専攻に、三宅和夫教授と故・岩本隆茂教授に基礎と臨床の両領域が分かる人間として誘われ、教授として赴任した。

札幌医科大学、北海道工業大学に続く3度目の職場であった。いずれも文系の人間としては異質の領域であり、慣れるのに時間がかかった。しかし、幅が広がり強くもしてくれた。看護福祉学部の立ち上げは毎日が藪の中を進んでいく感じであった。専攻の教員全員で車を連ねて、実習先開拓のため、渡島コロニーまで行ったのは今にして思えば懐かしい。

学年進行で大学院修士課程、博士課程の立ち上げにも参加した。D○号教授資格は、今にして思えば、よく認めてくれたと思う。できて間もない臨床心理士養成の第2種指定大学院になったのもこの頃であった。

看護福祉学研究科の博士課程の完成後直ちに、心理科学部と心理科学研究科の立ち上げを行った。この作業は、当別の

学部学生、大学院生の教務進行と教室の改修、あいの里の教務進行と教室改修、教員の当別とあいの里との移動などが並行して行われ、毎日が薄氷を踏む思いであった。GPの採択と事後評価結果Aは快挙だった。

ゼミは自主自立の精神でしたが、よくついてくれました。研究職に向かった人、ベンチャーに就職した人、臨床の専門職に就いた人、様々な人と出会いました。あいあい祭りでホタテ焼の店を出したり、心理科学部の前に雪像が作られたり、最も多い時で1ヶ月に1度のコンパをしたり、楽しい時を過ごさせてもらったことに感謝します。

18年間、いくつかの役職、大学設置審議会とのやり取り、大学基準協会の主査等、高等教育評価機構の評価員、GPの事後評価員などの経験を通して、大学と大学院の問題を広く学ばせて頂いたことにお礼し、支えてくださった学内外の方々に感謝いたします。



心理科学部 教授
土肥 聡明

2002年4月に、あいの里に心理科学部が新設されると同時に赴任して、この3月末で丁度10年になります。この心理科学部が在学生にとっても、大学受験を目指す受験生にとっても、魅力的な学部として受け入れられることを目標にし、そのために他の教員の方々と協力しながらの毎日でしたが、気がつけば10年、そして定年という年齢になっていました。今年送り出す卒業生はまだ6期生ではありますが、この10年間、講義、実験、実習、ゼミ等を通しての学生との関わりや様々な出来事を通して、認識を新たにしたこと、学んだことも多かったと感じています。その意味で、これまで一緒に学生の教育に関わってきた先生方、大学職員の方々と、そして、私の授業、ゼミに食いついてきた学生さんに感謝し

たいと思っています。

今回、私を含めて、4人の教員が定年退職となり、心理科学部は世代交代ということになります。心理科学部にとっては、成熟した学部として世間から安定した評価を得、社会における存在感を定着させることが、次の10年の課題かなと思います。しかし、世の中の流れの大きな変化(経済状況、受験生の減少傾向等々)の中で、次の10年はなかなか厳しい時代になりそうという感じがあります。この心理科学部が、次世代の教員のもとに、さらなる発展をとげることを願い、その様子をこれからも見守っていきたいと思っています。



心理科学部 講師
石川 美子

1991年4月、あいの里に札幌医療福祉専門学校言語聴覚療法学科が開設されて10年、2002年に北海道医療大学心理科学部言語聴覚療法学科に移行してから10年と、20年間にわたる多くの皆様からのご指導・ご支援に深く感謝いたします。教職員そして学生の皆様の支えにより、東日本学園の日々を豊かに過ごすことができましたこと、心よりありがたく思っております。

学科は言語聴覚士養成の北の拠点として、卒業生たちを稚内から沖縄まで全国へと送りだしています。1997年に言語聴覚士法案が成立し、国家資格が法制化されました。言語聴覚士はコメディカルの専門職として認められ、身分の保障や職務内容の

多様化とともに、卒業生たちの活躍の場は広がって行きました。

さきの東日本大震災で被災した宮古、陸前高田、石巻、仙台、そして福島の卒業生たちは、ひたすら前に進んでいます。医療チームの一員として、前例のない状況にとまどいながら、支援を必要とする人々とともにあゆんでいます。

言語聴覚士養成教育の現状については、様々な課題が残っており、今後も改定が必要になっています。次の時代を背負っていく若い方々が、言語聴覚士の自立に向けて、根気よく取り組んでくださることをお願いいたします。



心理科学部 講師
山路 めぐみ

21年と半年くらい前の7月始めころでしたが、「専門学校を作るので一緒に仕事をしませんか」とのお話をいただき、中島公園横のパークホテルのロビーで、当時の土産田事務局長さんと田多法人本部長さんにお会いしました。少し遅れて、もう一人の方が現れました。その方が第2代学長の安倍三史先生でした。面接だと思っていたら、「よろしくお願ひしますよ。」とお話で、あまり時間もとらずに帰られたのですが、その時「朝、学生さんに『おはよう』と言ってくださいね」と、おっしゃったのです。開校後間もなくの頃、安倍先生が学校にいらした時、私に「え～、みどりさん」と、まちがった名前呼びかけて下さり、名前も覚えようとしておられることがわかりましたので、それ以来、学生さんにはま

ず挨拶、それから名前を覚えることをモットーにしてきました。エレベーターの中などでは、「授業はもう終わりましたか」などと話しかけるようにもしていました。そのような21年間の教員生活で、「名前」は覚えても忘れてしまうことが多く、何回も思い出す練習をして、学生さんには迷惑をかけてしまいましたが、「おはようございます」と「さようなら」は、どの先生よりもたくさん言えたと思います。街では学生さんに声をかけないようにしていましたが、他の学科の卒業生に「先生、卒業生です」と声をかけられたこともあり、うれしい思い出になっています。学生さんのふみ台になれたかなと思っております。